



医学部だより

第23号

2011.10.1

特集

国際交流



医学部学生と国際交流

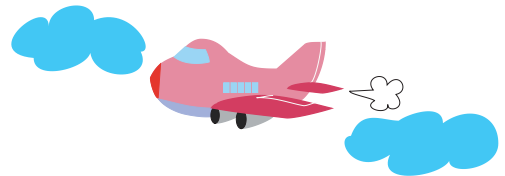
医学部長 玉置俊晃

東日本大震災による津波被害と福島原発事故は、未曾有の大災害であり日本の全勢力を総結集して早期に復興を達成したいものです。しかし、未曾有の大災害であっても日本人の力を結集すれば日本の未来は明るいと、私は信じています。決して、日本の将来を悲観したり、内向き思考になることはありません。徳島大学医学部の学生さんは、大きな夢を持って自分の将来に向かって世界で通用する医療人を目指して自らを鍛えていただきたい。

医学部の学生さんは、どの学科であれ国家試験を受験して医療人を目指しますが、国家試験の合格が目的であってはいけません。国家試験は単なるチェックのための通過点であるだけです。徳島大学に入学できる学生さんは、普通に勉強していれば間違いなく合格出来ます。徳島大学医学部の学生は他大学の学生より一歩前に出て、国際的に通用する医療人になって欲しいと、私は切望しています。医学や医療の世界は、国際的な環境下で毎日の様に進歩を続けています。自分の周囲の医学・医療レベルのみで自己評価をしては問題になる事があると思います。常に国際標準で自己評価をして、生涯教育を実践していかない

と、医療人として良い仕事は出来ません。医師の世界では、EUとアメリカを中心に医師免許のグローバル化が着実に進んでいます。近い将来には、EUと米国の医師免許が一体化される可能性が高いと思います。このような状況下で、日本の医師にも国際標準化された知識・技術・態度が求められます。

このような状況は、医師だけでなく看護師・栄養士・放射線技師・検査技師などの世界でも起こると思います。学生の時代から、海外の学生と接してコミュニケーションができる能力を身につける必要があります。単に海外の学生さんとお付き合いが出来れば国際的に通用する医療人になれる訳ではありませんが、海外の学生や研究者と接する機会を持つことで、多種多様な歴史や文化を持つ人々の中でも通用する医療人になるためのヒントをつかめる様に思います。



目次

CONTENTS

特集：国際交流	1	各賞受賞者	10
オープンキャンパス	5	平成23年度6年生OSCE成績優秀者	11
東日本大震災支援	6	第62回西日本医科学生総合体育大会	11
学遊抄	7	第45回全日本医科学生総合体育大会	11
学生委員会から保護者の皆様へ	8	新任教職員あいさつ	12
教務委員会から	8	医学部行事予定	12
数字で見る医学部	9	編集後記	12
徳島医学会報告	10		

テキサス大学 サマー・リサーチ・プログラム

報告

医学科4年 暮部 裕之

私はこの度、5月末から約2か月間、テキサス大学ヒューストン・ヘルスサイエンス・センターでのサマーリサーチプログラムに参加させていただきました。このプログラムは、アメリカの医学生や医学部を目指す学生、および海外の提携校からの



医学生を対象に、各自興味のある分野の研究室で医学研究を約2か月間行うものです。私は感染症内科に配属され、HIV感染症についての研究を行ってきました。朝から晩まで実験室で実験をし続ける日も少なくなく、思っていた以上に忙しかったですが、充実した研究生生活を送ることが出来ました。実験で忙し



い中でも、寮のルームメイト達と食事や買い物と一緒に出かけたり、テキサス大学の医学生との大学外での交流も多くあり、大学の研究以外でも非常に充実した日々でした。2か月という短い期間でしたが、世界が変わったと言えるほど大きな影響を受けることが出来ました。

今回、このような貴重な機会を与えて下さった玉置医学部長をはじめ、多くの諸先生方に深く御礼申し上げます。

医学科4年 林 宏子

私は5月末から8週間、テキサス大学ヒューストン・ヘルスサイエンス・センターで開催されたサマー・リサーチ・プログラムに参加させて頂きました。内科の腫瘍部門の教授であるDr. Bullに担当教官になって頂き、腫瘍の温熱療法の研究に携わらせて頂きました。患者さんが実際に温熱療法を受けている様子を見学させて頂くこともできましたし、先生の外来について回って患者さんとお話する機会もありました。70歳近くの女性であるDr. Bullが朝から晩まで病棟、研究室、教室、症例検討会と動き回り、いきいきと働かれている姿には非常に刺激を受けました。

テキサス大学メディカルスクールの1年生たちや、中国、台湾からの留学生たちと交流する機会もありました。人との出会



いに恵まれた、素晴らしい8週間でした。

最後になりましたが、今回の留学にあたり大変お世話になりました。玉置俊晃医学部長、福井清教授、カルビ・ブカサ先生、村澤普恵医学部長補佐をはじめ諸先生方に厚く御礼申し上げます。

ソウル医学大学 サマー・リサーチ・プログラム

報告

医学科3年 小淵 香織

7月18日より3週間、ソウル国立大学校医学大学のサマーリサーチプログラムに参加させて頂きました。

私は予防医学部門のHong教授のもとで、気候変動が健康に与える影響について学びました。配属初日に、私がこのプログラムを選んだ目的である1) 地球規模での健康調査について学ぶ、2) 英語でのディスカッション、3) 将来国際保健に携わる上でのアドバンテージを得る、の3点を教授に伝え、3週間の予定を決めることができました。週2回のジャーナルクラブ(論文を持ち寄って発表、討論)の他に、疫学調査の基礎を学びました。そして7月27、28日にはWHO主催の大気汚染に関する国際会議がソウルで開かれ、Hong教授が議長となっていたため参加させて頂くことができました。研究以外にも、ラボのメンバーでのピクニック、週末ごとの観光などとても充実した



日々を過ごすことができました。

今回の留学にあたり、大変お世話になりました玉置医学部長はじめ村澤医学部長補佐ほか諸先生方に厚く御礼申し上げます。

医学科3年 神田 瑞希

7月18日からの3週間、ソウル国立大学校医学大学(SNUCM)のサマースタディプログラムに参加させて頂きました。私は免疫学部門のLee教授の研究室で乳がん転移におけるmiRNAの働きについて研究しました。Lee先生の研究室にはインターンシップに参加しているソウル市内の他大学の学生や研究職志望のSNUCMの学生がたくさん集っていました。研究室で実験をして過ごした時間は勿論ですが、実験の合間に彼女たちとキャリアの話に始まりガールズトークまで様々な話を出来たこともとても良い経験になりました。また学外では、ソウル市内の観光やバスでの小旅行、徳大に交換留学プログラムで来ていたSNUCMの学生さん達との交流など韓国を満喫しました。ソウルでの3週間はあっという間でしたが、自分に足りないものを見つめ直し、もっともっと勉強したいと刺激を受けること



の出来る充実した毎日でした。このような機会を与えて下さった先生方、関係者の皆様に感謝の気持ちで一杯です。素敵な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

医学科3年 山森 温

今回、ソウル国立大学校医学大学のサマースタディプログラムに3週間参加させて頂きました。研究室配属の一環という形で、ソウル大学のSeok教授の研究室でお世話になりました。平日は朝から研究室に通い、夜や休日はソウル市内を観光したり、ソウル大学の学生さんと交流したりと有意義な3週間でした。研究に関しては、癌の増殖にマクロファージがどのように関わっているかを実験し、論文を読んだり、研究室の先生方とディスカッションしながら、主体的に勉強をするいい機会になりました。最終日には発表する機会も設けてもらい、英語でプレゼンをして、ディスカッションまで行う機会を与えてもらいました。私にとって韓国は、近くて遠い国だったので、今回韓国に行き、韓国の同年代の友達が出来て、韓国の歴史や日本との相違点を自分の目で見たことによって、もっと韓国のことを知りたいと思いました。地理的に近い分交流もしやすいので、研究面でも切磋琢磨していけたらと思いました。今回、このプ



ログラムに参加するにあたり、玉置医学部長、村澤医学部長補佐をはじめ、諸先生方には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

ハノーバー医科大学 交換留学生プログラム

報告

栄養学科4年 黒田 雅士

私はMHHで生化学の研究を手伝わせて頂いているところで。この原稿を書いている時点で半分以上滞在期間が残っているところではありますが、これまでの一ヶ月も本当に密度の濃い時間でした。平日は日々実験を学ばせて頂いており、あっという間に一日が終わります。こちらに来て感じることは、より意見を求められること。私がまだ学部生、日本での研究活動もほとんど始まったばかりであるにもかかわらず、先生との話し合いでは必ず「どう思う？」という風に尋ねられます。最初の頃は聞くことばかりだったのですが、徐々に質問や自分の意見を伝えられるようになったと思います。今後は、より積極的に伝えるようにしてみたいと思います。

また週末はこちらで知り合った友人達とお祭りや博物館に行きました。歴史を感じさせる町並みや建築物は人々の意識の高さを感じさせます。



まだまだ、学び足りないと感じますし行ってみたい都市もたくさんあります。残り2ヶ月、今まで以上にアクティブに動くことを心がけたいと思います。

医学科4年 今 泉 絢 貴

私は、ハノーバー医科大学（MHH）の小児外科の医局で臨床実習をして来ました。広い病院の敷地内に大きな小児科病棟があり、そこに外来病棟、入院病棟、手術室すべてが含まれていました。MHHでは低侵襲治療が有名で、多くの腹腔鏡を使った手術が行われていました。スタッフ間での連携が素晴らしく、術前・術後の管理や患者の移動などがスムーズに行われており、多い日には二つの手術室で8例もの手術が行われていました。このような環境下で手術や病棟の回診などを見学させていただけたことに感謝しています。今回の留学では小児外科のみの見学でしたが、他の医局も見学できたかと思いました。言語の面で色々とお苦勞もしましたが、参加したことで得られた経験を今

後の学習に生かし、広い視野で様々なことを見ていけるように努力していきたいと思っております。このような素晴らしい機会を与えてくださった玉置先生、中屋先生をはじめとした多くの先生方にお世話になりました。この場をお借りして深く感謝いたします。



続けることの意義 —海外研修に携わって—

放射線技術科学専攻
長 篠 博 文

例年3月に行っている保健学科学生の10日間以内の短期海外研修は、今年で8年目を迎えました。これに当初から携わってきた者として所感を申し述べたいと思います。

発端は2002年当時の学科長から私への、フロリダアトランティック大学（FAU）での看護学専攻学生の海外研修実現に協力するようとの指示でした。というのは、私は2002年に当学科に移る前、工学部電気電子工学科在籍中の1989～90年に1年間FAUに滞在して共同研究を行った後、帰国後も多くの方々のご理解・ご尽力を得ながら交流協定の締結、教員・学生の交流に貢献していたからです。

当時のFAU国際プログラム室長に依頼して、FAU看護学部長の受け入れ了解をとりつけ、2004年の研修実施に至りました。私としては、私の所属する放射線技術科学専攻でも同様の研修を実施したいと思いましたが、診療放射線技師を養成する教育課程はFAUにはなく、近隣ではコミュニティ・カレッジ（CC）にしかありません。幸い本医学部はテキサス大学のヒューストンヘルスサイエンスセンター（UTH）とも交流協定を結んでおり、これに隣接して放射線治療では世界一、二を争うM.D.アンダーソンがんセンター（MDA）があります。そこで、これらへの訪問を組み込んで研修プログラムを作成できないかと考えました。UTHのWebsiteを調べるうちに、大学院の医学物理士養成コースに行き当たり、これが使えると思い、UTH側で本学との交流の窓口を務めておられるKulkarni教授にお願いしたところ、労をいとわず快く協力していただくことができました。訪問を重ねるうちに、MDAの陽子線治療センターに鈴木准教授が着任され、さらに充実したプログラムを作成していただくとともに、鈴木准教授の本学での特別講義の毎年実施に至っています。また、小牧教授やCox教授とも知り合うことができ、その恩恵は学内に広く及んでいます。

FAUでも日本語を学ぶ学生との交流を行ったり、最近開設された医学部を日本人の教授の先生に案内していただいたりすることもでき、「放射」の学生にとっても有意義な研修ができるようになりました。CCから4年制になったブラワード大学とその関連病院を合わせて、優れた研修プログラムが組めるようになっていきます。

クラスの人数が少ないため研修参加者も少数とはいえ、毎年続けて行くことができ今年で6年目となり、のべ12人の学生を派遣するに至りました。学部生の国際的活動への意識醸成を主な目的にした、このようなごく短期間の見学中心で教員が引率する研修に対しては否定的意見も耳にしますが、一方では励まして下さる方々もおられ、何とか続ける意欲を絶やさずにここまでやってきました。

現在は、同じことをこつこつ続けても評価を得にくく、次々と目新しいことをやるとその都度評価される時代のようなのです。しかし、私は一つのことに執着し続けるタイプの人間です。私とFAUとの交流は21年を越えました。今年の3月で訪問は19回目です。BCは6回、UTHは4回訪問しました。交流を続けて行くには、実際に交流を行う者どうしの信頼関係が最も重要です。それが築けなければ長続きしません。相手方にも当方にも信頼できる友人を見つけることが重要です。幸い私は訪問先で多くの友人を得ることができましたし、友人を学生諸君に紹介できることが楽しみであり、また意義深いことと思っています。また、当専攻の先生方の絶大なるご協力をいただいています。

交流が一人の教員のみで行われていることがよくあります。その場合その教員がいなくなると、その相手先との交流は立ち消えます。FAU、BC、UTH、MDAと保健学科の間には長く続く交流の間に多くの人々の重層的な人間関係が構築できています。たやすく壊れるような関係ではなくなりました。



フロリダアトランティック大学にて、2011



ブラワード大学にて、2010



テキサス大学ヒューストン校にて、2009

オープン

Open Campus

キャンパス

医
学
科

8月5日、大塚講堂において医学科オープンキャンパスが開催された。昨年同様の猛暑にも拘わらず、高校生を中心に300名近い参加があった。当日は、玉置医学部長の挨拶の後、臨床、基礎のミニ講義が行われ、また西村入試委員長（法医学分野教授）による医学科紹介が行われた。臨



床医学からは心臓血管外科学分野北川哲也教授が、心臓外科の歴史についてビデオを交えてわかりやすく講義され、また基礎医学からは、井本（人類遺伝学分野）が遺伝医学の基礎に関して講義を行った。参加者が、時には頷きながら非常に熱心に講義に耳を傾けている姿が印象的であった。続いて、施設見学として、医学科、疾患ゲノム研究センター、疾患酵素学研究センターでご協力頂いた各研究室、総合研究支援センター、スキルスラボ（医学教育開発センター）等の見学を行った。終了後の参加者の様子から、短時間でも、ミニ講義や施設見学を通じて医学科、蔵本キャンパスにおける、教育・研究環境を体感することで、本学の魅力が伝えられたのではないかと感じられた。一方で、オープンキャンパス以外にも、例えば蔵本祭などで現役徳島大学生からも将来の先輩候補として本学の魅力を生の声で伝えてもらう、あるいはグループとしてラボの一日を体験してもらうなどの、多角的な試みも必要かもしれない。学生にこんなところで学生生活を送りたいというモチベーションを持って入学を志してもらうための努力を今後も期待したい。

（井本逸勢）

栄
養
学
科

8月4日午前为荣養学科のオープンキャンパスを開催いたしました。大塚講堂にて、寺尾学科長の挨拶に引き続き、入試委員の中屋から大学の紹介、平成24年度入学者選抜の概要、入学者状況、栄養学科卒業生の就職状況を説明しました。特に、25年度入学試験からセンター試験を課さない推薦入試、数学IICなどの個別試験の削除など、大きく選考方法が変更されるため、詳しく説明しました。ミニ講義「リンの栄養学」（宮本賢一 分子栄養学分野）、「歴史から学ぶ栄養学」（中屋豊 代謝栄養学分野）が行われました。研究棟の見学では、昨年に引き続き、各部屋に案内係を付け、受験生に説明したり、質問を受けました。同時に2つの教室の学部学生の卒業研究の中間発表会を開き、どのような研究をしてい

るかの紹介も行いました。当日は、徳島県を中心に北海道から九州、沖縄まで、約200名の受験生、保護者および教員に参加いただきました。最後にオープンキャンパスに関する、各種アンケートに答えていただきました。ミニ講義では、栄養に興味があるなどの意見がありました。また、研究施設の充実ぶりにも関心があったようで、「入学したいという気持ちがさらに強くなった」というようなコメントもありました。受験生にとっては、大きな講堂では発言しにくいようでしたが、案内係の大学院生などには気軽に質問ができたようです。オープンキャンパス後の栄養学科の印象としては、従来の「調理や給食」などを中心とした栄養学ではなく、「医学教育」を基盤にした栄養学の実践の場であるとの意見が多く聞かれました。

（中屋 豊）

保
健
学
科

8月4日午後から、保健学科のオープンキャンパスが開催されました。毎年参加者は増えており、今年の参加生徒数は456人でした。多くの生徒の皆さんと保護者の方々が参加して下さい、大塚講堂が狭く感じるくらいでした。最初は大塚講堂で、学科長のあいさつ、入学試験の説明、各専攻主任より専攻の紹介を行いました。その後、専攻ごとにわかれて、施設見学と相談会を実施しました。本年度から、オープンキャンパスの参加が事前予約制になったため、各専攻で参加者数が事前に把握でき、スムーズに進行することができました。施設見学も、人数がわかっていたため、少人数のグループで見学してもらえるように準備しました。施設見学では、どの実習室でも参加者は説明に耳を傾け、質問も出るなど関心の高さが窺えました。参加者からは多くの実習室を丁寧に説明してもらいながら見ることができて、来てよかったという声が聞かれました。相談会でも、入学試験や資格・就職等に関する質問が多

くあり、真剣に本学科を目指して参加して下さいということが伝わって来ました。個別の相談希望者も多く、保護者の方も含めて、最後まで熱心に相談する姿が見られました。夏の差しがまぶしい時期での開催でしたが、キャンパスには高校生の皆さんのさわやかな笑顔があふれた半日でした。（關戸啓子）



東日本大震災支援

忘れないこと

医学科6年 横山和樹

3月11日以降、連日テレビで報道される被災地の映像を見ながら「今、自分たちにできることが募金以外にもあるのではないか」という思いを抱くようになりました。そんな折、友人の一人が「東北に行こう」とクラスメイトに呼びかけこの活動は始まりました。この時期に「現地に行く」という選択が本当に被災者の方のためになるのかという葛藤はありました。また連日深夜におよぶ話し合いでは様々な問題が浮上りました。それらを1つ1つ解決していき、約1か月半に及ぶ準備期間を経て、徳島のNGO団体TICOのバックアップのもと、4月29日から5月5日まで宮城県石巻市と東松島市でボランティア活動を行い、全員が無事に帰ってくることができました。現地入りしたのは、全国の大学生に呼びかけた結果、徳大生12人（医、薬、総科）、他大学21人（旭川医大、北大、札幌医大、千葉大、北里大、浜松医大、福井大、香川大、高知大、島根大）の計33人で、準備を手伝ってくれた学生は全国にさらに大勢います。

私たちが行った活動は主に2つです。1つは石巻市のNGO団体フェアトレード東北を中心として進められていた、各家庭の聞き取り調査の協力。もう1つは、東松島市の民家の床上、床下に溜まったヘドロ出しの仕事です。ヘドロ出しの仕事はひたすら力仕事で、自分たちが頑張った分だけ目に見えて成果が表れ、ある意味やりがいを感じることができました。しかし、15人以上が連日作業しても全く終わりが見えず、「復興」とは、この

ような地道な作業を誰かが根気強く行っていった先に見えてくると、身をもって知りました。聞き取り調査は、各家庭の経済状況や健康状態などを一軒一軒聞いて回りその家庭ごとに必要な支援を考えすぐに対応するというものでした。緊急の支援が必要な家庭が何軒もあり、一軒一軒個別に対応する細かな支援が必要な段階に入っていることを知りました。また実際に被災者の方と直接お話しするこの仕事は、想像以上に重いものでした。自分の目の前にいる被災者の方々は、確かに私たちと同じように毎日平和に暮らしていたのに、あの日を境に奥さんを亡くし、あるいはご主人を亡くし親を亡くし子供を亡くし、それまでの生活が全く変わり、しかし残されたものとして生きていかねばならないという状況におられました。被災地の方々がそれでも気丈に振る舞おうとされる姿に言葉が出ませんでした。

学生の私たちにどれだけのことができたかはわかりません。ただ、被災者の方が笑いながら、あるいは涙ぐみながらありがとうと言ってくれたのを見たときに、来てよかったのかもしれないと思いました。そして人と人が直接会うことで届けられる何かがあると感じました。実際に東北に行くことで遠かった被災地を自分の日常に引き寄せることができました。「忘れないでほしい」そんな現地の方のことばを胸に私たちはこれからも自分たちにできることを継続していきます。東北で出会った人たちの笑顔と涙を私たちは忘れません。



被災地を訪れて

医学科3年 吉松由布子

4月30日、宮城県多賀城市と塩釜市の境に位置する坂総合病院を震災支援のために訪れました。しかし震災支援といっても何ができるのかわからない中でのことでした。そもそも私が宮城県へ行くことになったのは、以前からお世話になっていた徳島健生病院での医療支援報告会に参加したことがきっかけでした。健生病院からも他の病院と同じく何陣にもわたって医師・看護師・事務からなる支援チームが派遣され、現地で見えたことを学生にも伝えたいということで学生向けの報告会を蔵本キャンパス近くで開いてくれました。そこで「絶対にあの現実を自分で見てくるべきだ」という言葉を聞き、私で役に立つことがあるならと思い、職員の方をお願いして行かせて貰える

ことになりました。現地に着くと、テレビで見た光景が広がっていました。違うのは鼻につく異臭とその光景が360°にあることです。私はそれに対して何の言葉もありませんでした。むしろ何か話すことが憚られるような光景でした。

到着してから3日間、坂総合病院の近くの避難所の多賀城市総合体育館に毎日向かいました。学生なのでできることは少なく、主に足浴（≒足湯）を提供していました。力仕事で中腰の体勢もきつかったですが、お湯の準備をしている間に整理券はすぐになくなるほど楽しみにしてくださっている方がたくさんいらしたと、私たち支援側を気遣う言葉をかけて貰えたことで頑張り切ることができました。

被災地の方が震災から5か月たった今、恐れていることの一つが、被災地以外の人間から忘れられてしまうことだと思います。実際に支援物資は少なくなりマスコミで取り上げられる機会も減ってきています。しかし、あの光景を実際に見て、避難所の方にふれあい辛さや悲しみを話してもらった私は決して忘れることができないし、それを他の人に伝える義務があります。私たちは震災のことを忘れない。そこから多くを学び、これからの医療・医師としての人生につなげていく。これが被災地から遠く離れた一人の医学生ができることだと思います。



学遊抄 学生時代

運動機能外科学分野 安井夏生

私は昭和22年7月に大阪の吹田市で外科医の長男として生まれました。夏に生まれたから夏生と名付けられました。当時の吹田市はまだ千里ニュータウンもできておらず、竹藪に囲まれた人口3万の田園都市であった。私は緑に囲まれた小学校に通い、野山を駆け巡る少年時代を過ごした。勉強などしなくても田舎の学校では成績はいつも一番であった。ところが中学、高校と理由あって大阪市内のマンモス校に移った。そこで知り合った友達の多くは下町の商売人の息子達であり、小学校の友人とは違う遅い価値観を持っていた。世間知らずの私は、大人の社会を知りつくしたような都会の同級生達に圧倒された。世の中の不正を平気で受け入れるような先生達の言葉にも失望し反発した。たまたまそういう年頃であったのかもしれないが、先生が嫌いになり、勉強が大嫌いになった。気がつけば不良と呼ばれる仲間に入り、逆らうこと、悪ぶることに快感を感じるようになっていた。良きにつけ悪きにつけ純情で気の小さな少年だった私は、団塊の世代のど真ん中で都会の競争社会の中で、もまれて育ったわけである。

高校で仲の良かった友人にミナミの繁華街の飲み屋の息子がいた。そいつはバイクで通学していたが免許証は持っていなかったと思う。家に遊びに行くと2階の賭博場から下着姿の母親が現れ、挨拶代りだと酒を振舞われた。煙草も勧められたが、その時は遠慮した。そのうち私も校舎の陰に隠れて仲間と煙草を吸うようになり、暴走仲間のバイクに乗せてもらって得意になったりもした。小心者が集団で悪ぶることに連帯感を求めたのだろう。学校の成績は下がる一方で両親は泣いていたに違いない。そんな頃、吉川栄治の剣豪小説「宮本武蔵」を読んだ。そこには郷里を追われた少年武蔵が「強くなりたい」という願望に胸を焦がし流浪の旅に出る姿が描かれていた。何か忘れかけていた純情な価値観を取り戻したような気がして嬉しかった。武者修行に憧れを感じた私は、近くの町道場に剣道を習いに行くようになった。

高校を卒業すると悪い仲間達はそれぞれ安易な道に進み、バイクの持ち主は進学もせずそのまま飲み屋の跡継ぎとなった。取り残された私は途方にくれ、行くところは予備校しかなかった。世の中から見放された気分であったが、気分転換に「宮本武蔵」を読み直した。すると不思議な勇気がわいてきて自分は今から医者になろうと決意した。目標が定まると、嫌いであったはずの勉強が嫌でなくなり、成績は見違えるように回復した。1年後には徳島大学剣道部医学科に入学することができた。

大阪から徳島に移り一人暮らしを始めたことで少し落ち着いた気がする。大阪では両親の庇護の下に、斜にかまえて悪ぶっ

ていたが、何か自分をごまかしている気がしていた。徳島で知り合った仲間はみな純情で素直なやつばかりであった。早速、剣道部に入部し、剣道を中心にした生活が始まった。私はもともと運動神経が鈍く、他のスポーツは何をやっても下手くそであったが、剣道にはそれなりの才能があったようで、試合にはよく勝った。「君は剣道の才能がある」等と先輩におだてられて、その気になっていた。医学生としてはそれなりの腕前であったが、警察機動隊の剣道には歯が立たなかった。「もっと強くなりたい」という素直な願望がいつの間にか私の胸を焦がすようになり、稽古日以外でも一人道場に立つことが増えた。

当時生化学の教授であった勝沼信彦先生が剣道部の顧問で、毎週のように道場に現れた。先生は当時40代であったと思うが、宮本武蔵のように腕っぷしが強く、手荒な剣道をされていた。先生自身の口癖が「もっと強くなりたい」で、教授官舎の庭木には突きの稽古をするための的が吊るされていた。よく学生には「俺に勝ったら生化学の試験は免除してやる」と挑発された。私は何度か勝ったつもりであるが、試験は免除してもらえなかった。稽古が終わってからも深夜遅くまで酒を飲み交わし、「剣道が一流になれば学問も必ず一流になる」と人生訓を述べられた。私はその教えに従い授業をよくサボったが、剣道の稽古だけは休むことなく続けた。5年生の時にはキャプテンを務め、学生としては最高位の4段を取得することができた。

剣道部では怪我をしたときも、風邪をひいたときも「剣道をやれば治る」といわれ、稽古は休ませてくれなかった。そのお蔭で規則正しい生活を送ることができた。私が留年することも無く卒業することができたのは剣道部に入っていたお蔭と思う。良き先輩、後輩に恵まれ、楽しく充実した学生生活であった。学生時代の私を知っている仲間は、あの安井がなんで病院長？と思っているだろう。



剣道部の同級生たちと。左からK君、私、T君、F君

● 学生委員会から保護者の皆様へ ●

医学部学生委員会委員長 石村和敬

昨年に引き続き本年も学部学生の修学状況についてお知らせします。

平成23年5月1日時点での医学部の在学学生は総数1358名で、内訳は医学科622名、栄養学科204名、保健学科532名(看護学専攻302名、放射線技術科学専攻154名、検査技術科学専攻76名)です。4月1日時点での留年者は、医学科31名、栄養学科5名、保健学科15名(看護学9名、放射線技術5名、検査技術1名)となっていて、学生数の多さを考慮しても医学科の留年者の多さが際立っています。特に1年生での留年は9名と多く、さらにその多くに勉学意欲の喪失が認められたことが今年の大きな特徴であり、私達にとっても大きな驚きでした。意欲の喪失が欠席による出席日数不足、成績不振へとつながりますので、今後の指導の強化が必要と感じています。参考までに過去3年間の退学者数、休学者数をあげてみます。平成22年度：退学者10名(医

学科4名、栄養学科1名、保健学科5名)、休学者16名(医学科9名、栄養学科2名、保健学科5名)、平成21年度：退学者5名(医学科3名、栄養学科1名、保健学科1名)、休学者23名(医学科12名、栄養学科4名、保健学科7名)、平成20年度：退学者9名(医学科2名、保健学科7名)、休学者15名(医学科3名、保健学科12名)です。医学科の平成22年度の退学者4名のうち2名はMD.-Ph.D.コースに進学した人で何も問題はありませぬ。病気による休学は仕方ありませんし、進路変更を理由とした休学、退学は希望がかなうように祈るのみです。意欲喪失者に対する指導が本年の重要課題と位置づけて、教務委員会の先生や事務の方々とも協力してできるだけサポートしたいと考えています。保護者の皆様には、是非日頃からお子さん達の生活状況や精神状態を把握していただき、明るく充実した学生生活を全うできるようにご助言いただけますようお願い申し上げます。

● 教務委員会から ●

医学部教務委員会委員長 福井義浩

最近の学生気質と医学部における 学生への対応

医学科では1年次と2年次の学生は小グループに分け、基礎系の教授が各グループの担任として学生の相談に乗っています(グループ担任)。さらに、今年度からほぼすべての保護者に学生の成績を通知することになりました。留年した学生に関しては、複数の教務委員が面談を行っています。最近目立つのは、極端に学業成績が悪い学生で、本試験でも再試験でも白紙に近い答案を提出することがしばしばみられます。

学生の生の声を聞きその要望を汲み上げるために、医学科では年に数回程度、各学年の代表と教員との学生懇談会を開催しています。これまでに多くの意見が学生から出ました。例えば、自習できる部屋を確保してほしい、控室のロッカーが使えない、構内の道路が凸凹で危ないので舗装してほしい、運動場にコンクリートブロックが埋まっているので除去してほしい、学食のメニューを

充実してほしい、自習室にパソコンが欲しい、チュートリアル室にスキャナーを設置してほしい、図書館の空調を夜間も入れてほしいなどの要望が出されました。これらの要望は可能な限り叶うようにしています。

次世代の医師、研究者には、国際的に通用する知識、技術、コミュニケーションスキルが重要になります。これらの能力を磨き、将来国際舞台で活躍できるような研究者、医師になってもらいたいと考えています。現在、3年生は午後に1年間蔵本地区の各研究室に分散して配属し研究活動を行うようになっています。なかには国際誌に論文を投稿したり、国際学会で発表したりする学生もいます。徳島大学は多くの大学と提携し国際交流を行っています。なかでも米国テキサス大学、独ハノーバー大学、韓国ソウル大学へは学生が短期間滞在し研究活動を行っています。蔵本キャンパスの整備も未だ進行中ですが、意欲のある学生、大学院生、研修医がその素質を伸ばし、勉学や研修が良い環境で行えるようにしたいと考えています。

数字で見る医学部

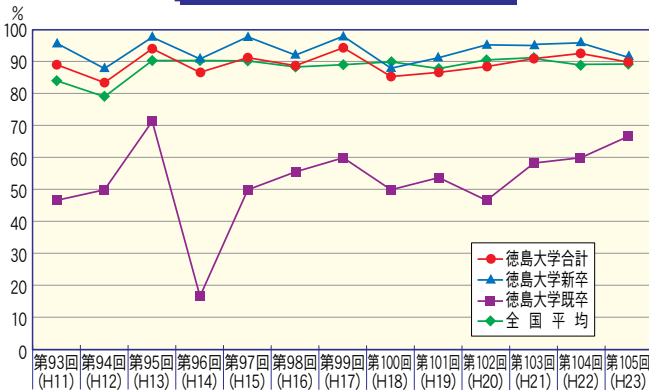
◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

平成 23 年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数調・入学者数調

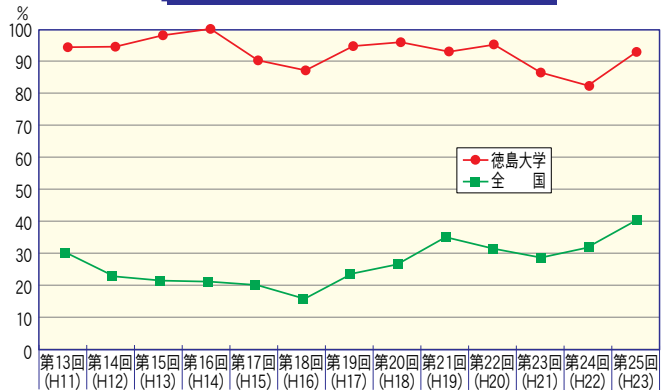
	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	海外	現役	一浪	その他
医学科	114	368	301	116	114	81	33	48	66	0	50	31	33
栄養学科	50	177	103	58	51	9	42	13	38	0	44	6	1
保健学科	看護	70	263	192	72	70	3	30	40	0	55	15	0
	放射	37	230	187	38	38	31	11	27	0	30	8	0
	検査	17	63	57	18	17	4	12	5	0	14	3	0

◆ 国家試験

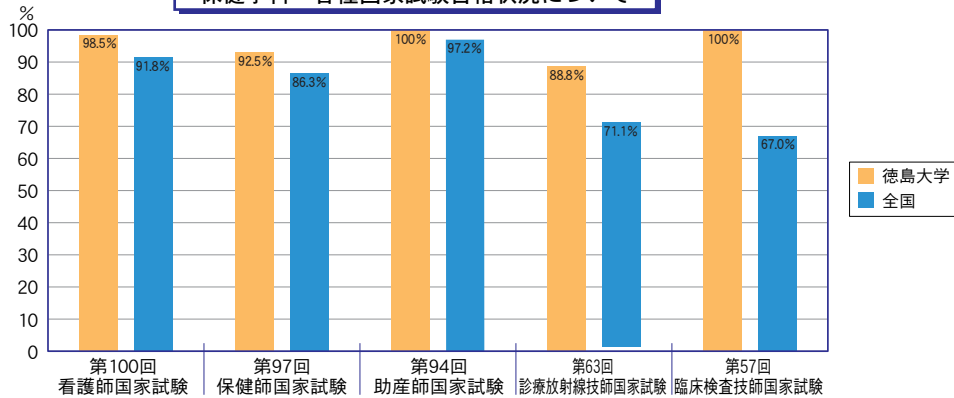
医師国家試験合格者の推移



管理栄養士国家試験合格者の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



◆ 科学研究費補助金採択状況（医学部・附属病院の合計）

(平成 23 年 6 月 1 日現在)

研究種目名	平成 19 年度		平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度		平成 23 年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
特定領域研究	8	63,200	6	41,200	4	28,900	2	8,600	1	4,800
基盤研究 A	1	11,100	1	13,900	1	11,500	1	11,500	0	0
基盤研究 B	13	67,000	14	72,700	15	75,500	19	92,600	19	78,900
基盤研究 C	57	93,100	65	92,983	69	89,800	78	82,400	87	108,800
萌芽研究	5	8,600	4	6,100	0	0	0	0	0	0
挑戦的萌芽研究					5	6,300	11	18,200	23	32,800
若手研究 (S)			1	25,200	1	14,400	1	14,400	1	14,400
若手研究 (A)	3	19,100	3	13,800	4	19,900	4	19,100	3	19,500
若手研究 (B)	46	70,500	39	59,600	52	77,600	47	69,400	51	66,600
若手研究(スタートアップ)	3	3,600	7	10,510	5	5,980	1	950	0	0
新学術領域研究					1	25,000	2	28,200	6	42,400
特別研究促進費					0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	4	3,600	1	600	5	3,400	5	3,500	4	2,800
合計	140	339,800	141	336,593	162	358,280	171	348,850	195	371,000

徳島医学会報告

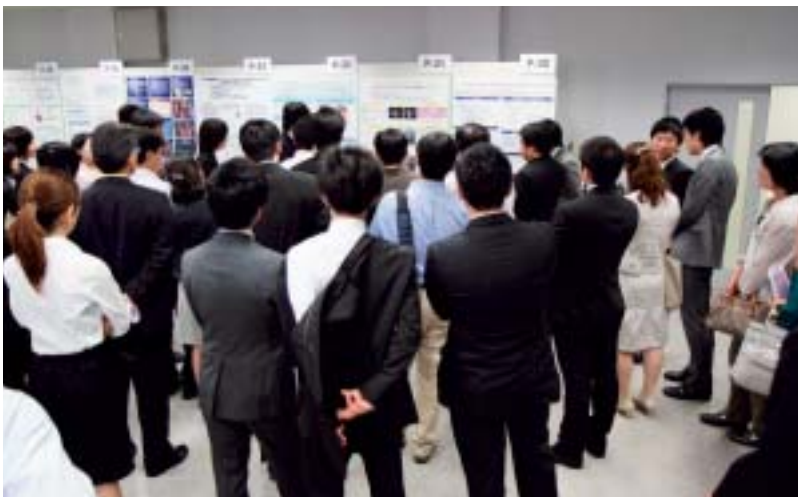
■ 第243回徳島医学会学術集会(平成23年度夏期)

運動機能外科学分野 東野恒作

7月31日(日)第243回徳島医学会学術集会が徳島県医師会館で開催されました。今回は、人類遺伝学分野(井本逸勢教授)と運動機能外科学分野(安井夏生教授)が担当し、午前中は「徳島県における健康保持増進体制、糖尿病の見地から」というタイトルで、糖尿病に対する徳島県での取組を紹介して頂きました。まず、石本寛子先生、野間喜彦先生から糖尿病地域連携の構築状況、医師、コメディカルの関わりをご講演頂きました。次に白神敦久先生から糖尿病地域連携の実施例として糖尿病手帳の活用を、前田実知代先生からは地域保健用連携パスの紹介を、最後に松久宗英先生からITを活用したモデル事業をご講演頂きました。教授就任記念講演では法医学分野の西村明儒教授が「死因調査から防災対策へー阪神から南海へー」という演題で阪神淡路大震災でのご研究と、未曾有の大災害となった東日本大震災での調査をご報告くださいました。専門家からの観点で捉えた災害の特徴、これから起こり得る南海大震災への対策について、今後の教訓となるご講演でした。ポスター会場は2つに分かれ、39題の演題について活発な議論が行われました。第26回徳島医学会賞受賞記念講演として消化器・移植外科の居村暁先生から「高度肉眼的門脈侵襲陽性の進行肝癌に対する治療戦略ー理論的根拠と臨床成績ー」、徳島市医師会の田山



正伸先生から「徳島市夜間休日急病診療所の現状と課題ー小児救急体制の危機ー」という演題でご講演頂き、第一線で活躍の研究は分野を超えて感銘を受けるものでした。午後は一般の方々に公開し、本学出身の山本博司高知医科大学名誉教授に「運動器の10年、世界運動」と題してご講演頂きました。身体を動かす運動器が健康で長生きするためにいかに重要か、また、わが国の代表として世界活動に参加されたご経験をご紹介頂きさらに、パネルディスカッションでは「ロコモティブシンドローム(運動器症候群)の原因と対策」として4名の講演がありました。後東知宏先生からは、まだ認知度が低いロコモティブシンドローム=ロコモの概念を、浜田大輔先生からは膝、股関節の痛みを、3番目の村田豊先生からは趣味のゴルフと腰痛疾患のご経験を、最後に佐藤紀先生からメタボとロコモを合わせて防ぐ運動療法をご講演頂きました。一般の参加者も大勢あり、高齢化社会を迎え平均寿命に対し、健康で自ら動ける健康寿命に関心が寄せられていることを実感しました。当日は暑い中、たくさんの方々にご参加頂き、大盛況のうちに終了することができました。最後になりましたが、ご協力して頂いた多くの皆様に深く感謝、お礼申し上げます。



今回も満員のポスターセッション

◆◆ 各賞受賞者 ◆◆

第243回徳島医学会学術集会において、下記の受賞者が選考されました。

第27回徳島医学会賞

大 学：大谷 彩子 (HBS 研究部臨床栄養学分野)
リン・ビタミンD代謝異常による異所性石灰化発症の分子機構の解明

医師会：中條 恵子 (川島病院)
慢性腎不全糖尿病患者の血糖コントロール指標ーHbA1cの信頼性ー

第6回若手奨励賞

藤岡 啓介 (徳島大学病院卒後臨床研修センター)
不明熱で発症し皮膚生検が診断に有効であった血管内リンパ腫の一例

原 知也 (徳島大学病院卒後臨床研修センター)
心サルコイドーシス診断の手引きにおける各種診断モダリティの検討

若葉会 奨学賞

医療法人若葉会の寄贈の趣旨に沿い、徳島大学医学部並びに徳島大学大学院医科学教育部及び栄養生命科学教育部に在学する私費外国人留学生（専攻生及び研究生を含む）の、奨学に資することを目的に授与されるものです。本年度は、次の3名が授与されました。

医科学教育部 医学専攻

博士課程4年次 練 高 建

医科学教育部 医学専攻

博士課程2年次 Tovuu Lkhagva-Ochir

栄養生命科学教育部 人間栄養科学専攻

博士前期課程2年次 周 菡



平成23年度 6年生 OSCE 成績優秀者

平成23年7月4日、臨床実習クリニックラークシップの総仕上げとして、6年生を対象としたAdvanced OSCEを実施しました。成績が特に優秀であった学生には、玉置医科学教育部長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して、臨床能力の向上が期待されます。

最優秀者 杉田 真理

優秀者 本間友佳子、山崎 裕行、大田 健人、林 桃子、
西田 望、羽星 辰哉、前川 達哉、五藤みづ帆、
石本 智之、富澤 彩智

部門賞(評点評価部門) 大村 玲奈、泉本 恵理

部門賞(概略評価部門) 中野 佑哉、溝渕 貴俊、横山 和樹、末廣 穂



第62回西日本医科学生 総合体育大会

柔道 女子個人戦

優勝 加 嶋 洋 子 (医学科4年)

準優勝 有 澤 麻 美 (医学科3年)



加嶋洋子さん(左)と有澤麻美さん(右)

第45回全日本医科学生 総合体育大会

柔道 女子個人戦

優勝 加 嶋 洋 子 (医学科4年)

新任教職員あいさつ



皮膚科学分野 教授 久保 宜明

平成23年10月1日付けで徳島大学皮膚科学分野教授に就任いたしました。私は阿南市出身（富岡西高卒）で、昭和63年に徳島大学医学部医学科を卒業し、大病院や小松島（現、徳島）赤十字病院で臨床研修を受けた後、徳島大学皮膚科学分野で診療、研究、教育に従事してきました。その間、癌研究所実験病理部やスタンフォード大学皮膚科へ留学し、主に癌関連の研究に集中的に取り組みました。剣道に一心に打ち込んだ昔をふりかえると、学生時代の一時期に学業以外の何かに集中することは将来につながるのかもしれない。

学部教育では、まず皮膚科伝統の「記載皮膚科学」を重視します。コンピューターでのキーワード検索が日常的な今日では、記載皮膚科学は皮膚病変（皮疹）からいかに多くの適切かつ重要なキーワードを引き出せるか、と言い換えることができます。また、皮疹から皮膚の病態に止まらず、メンタル面も含めた全身の病態を考える必要があります。「皮疹をみる」ことは皮膚科医を志望する人のみならず、どの診療科へ進む人にも重要だと考えます。皮疹の基礎を理解いただき、皆様とともに皮膚を中心とした研鑽に努めてまいりたいと思います。

新任准教授紹介

異動年月日	異動内容	氏名	職名	所属	前職
H 23. 8. 1	採用	堀口 英久	准教授	人体病理学	兵庫県立淡路病院病理診断科部長

医学部行事予定

（平成23年10月～平成24年3月）



10月3日(月)	後期授業開始				
10月14日(金)	解剖体慰霊祭		24年		
11月2日(水)	徳島大学開学記念日		1月上旬	第26回管理栄養士国家試験願書受付	
11月3日(木)～5日(土)	大学祭				(1月中旬まで)
11月14日(月)	第106回医師国家試験願書受付 (12月2日(金)まで)			試験日：3月下旬	
	試験日：2月11日(土)～13日(月)		1月14日(土)	大学入試センター試験 (15日(日)まで)	
11月25日(金)	第95回助産師国家試験願書受付 (12月16日(金)まで)		2月25日(土)～2月26日(日)	入学試験 (前期日程)	
	試験日：2月16日(木)		3月12日(月)	入学試験 (後期日程)	
	第98回保健師国家試験願書受付 (12月16日(金)まで)		3月19日(月)	医師国家試験合格発表	
	試験日：2月17日(金)		3月23日(金)	卒業式・大学院修了式	
	第101回看護師国家試験願書受付 (12月16日(金)まで)		3月25日(日)～3月31日(土)	学年末休業	
	試験日：2月19日(日)		3月26日(月)	助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表	
12月20日(火)	第64回診療放射線技師国家試験願書受付 (1月10日(火)まで)		3月31日(土)	診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験の合格発表	
	試験日：2月23日(木)			*管理栄養士国家試験の合格発表は、5月上旬	
	第58回臨床検査技師国家試験願書受付 (1月10日(火)まで)				
	試験日：2月22日(水)				
12月25日(日)	冬季休業 (1月7日(土)まで)				



徳島大学は、学校教育法第69条の3第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準」を満たしていると認定されました。

(平成19年3月28日)

●認証評価機関

独立行政法人大学評価・学位授与機構

●認証期間 7年間

(平成19年4月1日～平成26年3月31日)

編集後記



震災と原発事故に対して徳島大学として多くの支援活動がなされているが、今回の医学部だよりには学生諸君による活動の一部が報告されている。医療系の学生ができることは多いはずであり、継続的な取り組みが欲しい。

学生の国際交流が盛んになり、ソウル医科大学にも短期留学が可能になっている。教員の願いは一つ。国際感覚を身につけた学生が将来徳島大学で、そして世界で活躍してくれることである。

(泉 啓介)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
 広報委員 酒井 徹(委員長)、泉 啓介、三田村佳典、森口博基、安友康二、田村綾子、米原壽男

本誌へのご意見・ご要望は、(第1総務係:大亀)E-mail:isysoumu1k@jim.tokushima-u.ac.jp まで
 お願いします。なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel:088-633-9118 Fax:088-633-9028 URL http://www.med.tokushima-u.ac.jp